

美術科

西澤 明

共同研究者 鷺山 靖（金沢大学）

1. 伝統文化教育を進めるにあたって

（1）ESD の確認

昨年度の学校研究で研究主題の核だった「ESD（持続可能な開発のための教育）」は、将来世代のニーズを満たしつつ現代の世代のニーズも満たす社会を構築する担い手を育てる教育である。「持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだし、それらを解決するのに必要な能力や態度を身に付ける」という目標は、学校教育法に示された「基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養う」と概ね同じことである。各教科の学習を通して環境、エネルギー、防災、生物多様性、気候変動、国際理解、世界遺産や地域の文化財等の様々な知識・技能の習得を図るのはもちろんだが、ESDの目的は、あくまでも「自ら課題を見つけ、解決するのに必要な考え方（思考力、判断力、表現力）」を育成することであり、学校教育の全ての場面で取り組むべき大きなテーマであることに注意しなければならない。

（2）伝統文化教育とグローバル人材の育成の位置づけ

今年度の学校研究で研究主題の核になっているのは、「伝統文化教育」と「グローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成」である。

伝統文化教育の目的は、自らの国や郷土の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を育てることであり、それは同時に、他の国々の伝統や文化に対しても理解を深め、他の国々もまた自国の伝統や文化を尊重し、大切にしているという意識や考え方を育てることでもある。

グローバル化が進む国際社会で活躍できる人材（グローバル人材）の育成については、求められる資質・能力として三つの要素、すなわち「要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力」「要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」「要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」を拠り所としている。

前述の伝統文化教育の目的はまさに要素Ⅲにあたる。つまり伝統文化教育とは、グローバル人材に求められる資質・能力の要素の一つであることを確認しておかなければならない。

（3）研究を進めるに当たっての課題

今年度ここまでの学校研究では、グローバル人材の育成に求められる三つの要素を伝統文化教育で育む資質・能力と捉えると仮定しており、そのことにより、例えばコミュニケーション能力の育成は伝統文化教育かといった不思議な議論も起こっている。先に述べた通り、伝統文化教育で育成を目指す資質・能力は、自らの国や郷土の伝統や文化についての理解と尊重の態度、及び、異なる文化や歴史についての理解と敬意の態度である。三つの要素の中ではⅢを担うものだと考えるのが妥当であり、Ⅲ以外の二つの要素については、「Ⅰ」は文字通り語学力とコミュニケーションの力であって、伝統文化に特化した資質・能力ではないし、「Ⅱ」は全ての教科等の全ての学習活動で育成を目指している目的であり、これもまた伝統文化に特化した資質・能力ではない。この点を踏まえて、教科としての取り組みを考える必要があった。

(4) 美術科としての考え方

上記(3)で述べた伝統文化教育の目的、育成を目指す資質・能力である「自らの国や郷土の伝統や文化についての理解と尊重の態度」及び「異なる文化や歴史についての理解と敬意の態度」は、確かに実践しにくい教科もあるように思われるが、美術科においては目標や学習内容と直接結び付く点が多い。例えば現行の学習指導要領に示された目標「豊かな感性や情操」の育成は、伝統や文化の理解に直結する心の働きである。平成三十三年から施行される新しい学習指導要領においても、その目標に「生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力の育成」が掲げられており、内容においても、「身近な地域や日本及び諸外国の文化遺産などのよさや美しさなどを感じ取り、美術文化について考える」(1年生鑑賞)、「日本の美術作品や受け継がれてきた表現の特質などから、伝統や文化のよさや美しさを感じ取り愛情を深めるとともに、諸外国の美術や文化との相違点や共通点に気づき、美術を通じた国際理解や美術文化の継承と創造について考える」(2・3年生鑑賞)、「日本及び諸外国の作品の独特な表現形式、漫画やイラストレーション、図などの多様な表現方法を活用できるようにする」、「国内外の児童生徒の作品、我が国を含むアジアの文化遺産についても取り上げる」(指導計画の作成と内容の取扱い)といった内容が掲げられている。

以上の考察から、美術科では、伝統文化教育はあくまでもグローバル人材に求められる資質・能力の要素Ⅲ、「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー」の育成を図るための教育と位置づけ、授業の計画、実践を行うことにした。

2. 資質・能力の育成にあたって

(1) グローバル人材の育成について

グローバル人材の育成を図るための具体的な授業については、二つの学年(2,3年生)で計画、実践を行った。

2年生では「樂茶碗」の制作を行った。桃山時代から今日に至るまで続く樂茶碗について、学習を通してその伝統や文化、歴史についての理解を図った上で、実際に手づくねによる造形と釉薬掛けを行った。素朴で、さほど難しくない作業は技能の差もできにくく、主体性や積極性の育成が期待できる。さらに、生み出される作品の、ろくろ成形の碗にはない武骨な形と、刷毛で塗られた釉薬の濃淡や、焼成によって偶然生まれる複雑な色は、日本の文化が潜在的に持ち、大切にしてきた侘び寂びの心である。自分自身で作った作品には愛着もあり、豊かな感性や情操を代表するものだと考えている。

3年生では「金沢のポスター」の制作を行った。自分達が暮らす身近な地域のよさを再確認、理解し、異なる地域の人達に発信することは、グローバル社会におけるコミュニケーションの方法として妥当だと考えられる。さらに、その制作に和の色や和の模様を取り入れることで、我が国に長く伝わってきた文化に対する理解の深まりを狙い、書きこむ文字を手書きではなくコンピューターで挿入することで、現代の文化に対する理解の深まりを狙っている。

(2) 関連・連携の考えられる教科等について

美術科以外の多くの教科では、具体的な事柄自体が学習内容になっている場合が多いが、美術科の表現活動では、発想・構想の能力や創造的な技能が主たる学習内容であり、題材やテーマは各学校の実情や教師の判断にゆだねられる場合が多い。そのため、各教科等の教科書や年間指導計画に示された題材名や学習事項をキーワードにしたつながりを見つけることは困難である。逆にそのことは他教科のキーワードを学習活動のテーマにできる自由さでもある。例えば、ESDを主題にした研究で教科

間のつながりを図った際には、鉛筆の様々な技法を用いた1年生の表現活動で国語科の「大人になれなかった弟たちに…」をテーマにし、一定の成果を上げている。そこで今年度は、他教科と関連、連携が持てるのではないかと考えるテーマとして、今年度は以下の二つの題材を計画、実践した。

2年生の「楽茶碗」では、社会科の歴史領域の桃山時代を背景とした茶の湯の文化について、理科では釉薬の発色の科学的根拠、技術分野では茶碗を入れる箱の制作、書写では箱書き、家庭分野では茶道の実際などが考えられそうだが、実現は難しいようだ。

3年生の「金沢のポスター」では、生徒が作品を構成する素材として用いたさまざまな事象、例えば衣食住、観光地、交通、スポーツ等について、英語科の紹介活動をはじめ様々な教科で取り上げられる可能性がある。

3. 成果と課題

(1) 成果

今回、伝統文化に関わって実践した「楽茶碗」と「金沢のポスター」の授業では、その計画の段階から、伝統文化とは何なのかを考え続けてきた。楽茶碗の持つ武骨な形や、焼成で生まれる単純だが複雑な色を見るとき、我々はなぜ深い精神性を感じるのだろうか。金沢のポスターで意図した和の色や模様とはいったいどこから来たのだろうか。

一つの仮説として考えられるのは、日本という国が持つはっきりとした四季の移ろいと、そこで生活する人々の美に対する感性の関係である。芽吹き of 若葉から始まり、夏の濃い緑、秋の紅葉。その移り変わりは四季という節目で捉えられがちだが、実際にはそこに明確な節目があるわけではなく、色は日々微妙に変化し続けている。その変化に触れてきた日本人が、その微妙な違いに対する感性を高めてきたことは想像に難くない。やがて葉が落ち、草木が枯れ、雪の白さに包まれる冬を通して、侘び寂びや余白の美しさに対する意識と、鮮やかな色に対するあこがれが生まれ、その美しさを使いたいという思いが膨らむのではないだろうか。

そして実際にそうした感性を表現しようとした時、使用できた自然の色料や材料は自ずと限られたものであったろう。手に入る鮮やかな朱や青や緑の色が建築や仏像に使用され、屏風や工芸品に金箔が用いられたのも当然だろうし、大半の色料は彩度の低い鈍く渋い色になったに違いない。日本の伝統文化を扱う際に大切にしたいのは、表面的な結果ではなく、日本の四季と、そこで暮らす人々の生活、そしてそこから生まれる感性という必然のアイデンティティーである。

(2) 課題

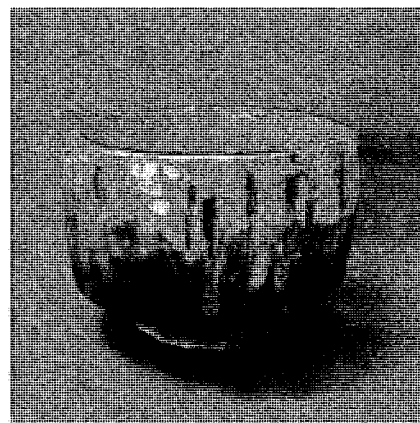
今年度の研究主題である伝統文化教育については、伝統文化自体の理解や、教科間のつながりを図る際の観点の整頓、共有がないままの研究実践だったため、結果的にとりあえず進む形になってしまった。実践の多くが、伝統文化だと思われる具体的な事柄、なんとなく伝統文化だと思われる事柄を扱う活動になってしまったのは仕方がないが、教科間をつなぐ資質・能力の観点は、そうした事柄の知識理解、技能の習得ではなく、その背景やその先にある感性の育成ではないかと考えている。

4. 実践記録

実践事例

美術科2年

授業者 西澤 明	授業日 6月27日(木) 1・2・3・4限	
授業クラス, 教科等名	2年1・2・3・4組 美術	関係・連携の考えられる教科等 国語科, 書写, 社会科, 理科, 技術・家庭科
扱う伝統文化 ・生活文化 ・伝統文化 ・地域文化 ・現代の日本文化	授業内容 「楽茶碗をつくる」 ・領域：工芸（焼き物） ・形：器（用の美） 材料：土	
特に関わる要素Ⅰ～Ⅲ 要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力 要素Ⅱ：主体性・積極性, チャレンジ精神 協調性・柔軟性, 責任感・使命感 要素Ⅲ：異文化に対する理解と 日本人としてのアイデンティティー	教科等で身に付けたい力（本時について） 日本の美術作品や受け継がれてきた表現の特質などから、伝統や文化のよさや美しさを感じ取り愛情を深めるとともに、諸外国の美術や文化との相違点や共通点に気付き、美術を通した国際理解や美術文化の継承と創造について考えるなどして、見方や感じ方を深める。	
授業のポイント・流れ <p>我々が日常生活で使用する器については、ろくろや機械による成形が多い。そうした器は左右対称で破たんのない、文字通り美しく整った形が多い。今回はそうした形とは違う、いびつで歪みがある器の美しさを、手づくねによる楽茶碗を手本に学習している。</p> <p>学校で扱う焼き物の活動では、輪積み、板づくりが多く、子供達の技能ではどうしても成形に未熟さが現れる。そのような“意図しない未熟さ”を評価する教師側の視点は大切だが、偶発的な現れの評価では中学2年生の発達段階としては物足りない。今回の授業では、「意図しない未熟さ」から一歩抜け出し、手づくねの楽茶碗に代表される歪みや破たんのある形の美しさやよさを“意識・意図”させ、日本人が持つ「わびさび」に代表される繊細な価値観を育てることをめざしている。</p> <p>ここまでの成形作業で、自分の手の中から生まれた作品に対する愛おしさや大切にしようとする気持ちが生まれている。高台と見込みを作る最終段階の今回は、より繊細な取扱いが必要であり、そうした生徒の姿を見落とさないようにしたいと考えている。</p>		



実践事例

美術科3年

授業者 西澤 明	授業日 11月13日(木) 3・4・5・6限
授業クラス, 教科等名	3年1・2・3・4組 美術 関係・連携の考えられる教科等 社会科, 理科, 技術・家庭科
扱う伝統文化 ・生活文化 ・地域文化 ・伝統文化 ・現代の日本文化	授業内容 自分達が暮らす身近な地域のよさを再確認し, 異なる地域の人達に発信することにした。さらに制作にあたって和の色や模様を取り入れること, 手書きや様々なフォントの文字や, 手書きではなくコンピューターで行う作業なども積極的に取り入れることで, 現代の文化に対する理解を深める試みを行った。
特に関わる要素Ⅰ～Ⅲ 要素Ⅰ: 語学力・コミュニケーション能力 要素Ⅱ: 主体性・積極性 チャレンジ精神 協調性・柔軟性, 責任感・使命感 要素Ⅲ: 異文化に対する理解と 日本人としてのアイデンティティー	教科等で身に付けたい力(本時について) ・発想・構想の力 ・視覚伝達のための構成力, 描写力 ・材料・技法等についての知識・技能
授業のポイント・流れ <p>本単元は教材としては目新しさのないポスターの制作だが, 今回は金沢をテーマに, 地元地域の伝統文化やそのよさを発信する目的を明確にした。ポスターを構成するモチーフ(素材, 要素)を, 金沢を代表する物品や場所などに求めること, さらに, 教科の学習内容における伝統文化に関わる知識として「和の色」と「和の模様」を取り上げ, ポスターの構成に用いることにした。</p> <p>課題として, 生徒の多くが自ら資料を探したり持参したりしないことが予想され, さらに資料がない生徒はそのまま何も見ないで描くことも予想されたため, 事前に金沢を代表する物品や場所などの画像をまとめた資料を用意し, それを用いて構想, 下描きを行わせた。</p> <p>「和の色」と「和の模様」については, 知識として指導したあと, こちらについても資料を用意し, それを写し取ることで自身の作品に反映させることにした。</p> <p>夏休み明けの作業は, 完成した絵柄の上に文字をレイアウトし, 着色することになる。絵柄を構成する事象を生かし, ポスター全体のイメージをより強調する文字を, 色彩, 大きさ, 位置などを考えながら決定することが大切になる。</p>	



